

第 1 回「(仮称) 泉南市認知症条例」制定に係る検討委員会 議事録

日時	2023 年 2 月 27 日(火) 13:30~15:30	場所	泉南市総合福祉センターあいぴあ泉南 3 階研修室 1・2
出席者 (敬称略)	【病院地域医療連携室相談員】 有本 弥生・青木 元明 【泉南市ケアマネジャー連絡会】 西本 優希 【泉南市介護サービス事業所連絡会】 久米 大都 【認知症対応型共同生活介護事業所】 篠原 カヨ子 【泉南市社会福祉協議会】 山崎 美和 【認知症当事者】 森井 洋一郎 【認知症当事者の家族】 森井 文乃・伊藤 哉柄 【泉南市地域包括支援センター・泉南市いきいきネット相談支援センター】 上川 敦 【泉南市地域包括支援センター】 佐藤 剛 【学識経験者】 永田 久美子・中島 民恵子 【泉南市】 谷村 真理子(障害福祉課)・谷岡 悦子(政策推進課)・幸前 弘樹(子ども政策課)		
事務局	【泉南市認知症地域支援推進員】 野崎 健・原 美穂子・大原 昌美・辻下 悦子 【泉南市長寿社会推進課】 藤原 秀紀・曾我 智子(兼認知症地域支援推進員)・有本 稀己・藤原 慶子		
配布資料	次第、検討委員会の設置要綱、委員名簿、スケジュール(案)、 スライド『「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」を活かして、ともに』		

【1.開会】

○山本 優真氏(泉南市長)

本日はお忙しい中お集まりいただき誠にありがとうございます。泉南市の認知症施策は、これまで積み上げてきた市独自の実績があります。これを生かしながら、皆が認知症を正しく理解し、暮らしやすく、それぞれの良さを発揮できるまち作りをしていくという考えから、条例の検討を進めることとなりました。認知症基本法が昨年 6 月成立、1 月に施行され、当然それに基づくわけですが、本市に合ったやり方について、様々な視点から意見を出し合っていただきたいです。

実は、私の祖母が認知症です。祖母は、昔飼っていた犬に味噌汁ご飯をあげていたようで、今も犬を飼っていて、ドックフードを与えていますが、気づくと祖母が味噌汁ご飯をあげていることがあり、いつも家族がそれとなく見守るようにしています。以前、祖母のために、家でイチゴ狩りをしました。なかなか家から出られないので、楽しみ方を工夫することで祖母も明るく過ごせています。認知症のある方が地域で暮らすには、幅広い世代が正しく理解し、認知症を他人事ではなく、我が事のように考えることが大切だと思います。皆でこの認知症施策、まち作りをやっていきたいと思います。忌憚ない意見交換で、良いものを作り上げていきましょう。

曾我) 認知症施策担当課の長寿社会推進課と、認知症施策の推進を中心的に担う認知症地域支援推進員が事務局となり、この検討委員会を進めていきます。設置要綱第 4 条第 1 項に基づき、委員長、副委員長の選出を行います。要綱では、委員の互選により定めるとありますが、推薦等はありませんか。事務局案としましては、委員長には永田委員、副委員長には中島委員にご就任いただきたいと考えております。皆さまよろしければ拍手でご確認をお願いします。(一同拍手)

○永田 久美子氏(学識経験者)

心して委員長を努めます。非常に大事な時期なので、出来るだけ皆さんの声、そして皆さんが繋がっている、市内に暮らす人、働く人たちの総意で条例が作られるように、総意っていうのは難しいかもしれませんが、それに近いものになるように一緒に作りましょう。私と副委員長の中島さんは、これからの泉南市のための条例になることに力を尽くします。

【2. 委員会の目的について】

有本) ネットワークの構築や集いの場の整備等、これまでの市独自の取組みを継続していきたいと考えています。現状では働く世代への啓発が行き届かず、ボランティア活動者からは、1 つ 1 つ丁寧な啓発活動を長年やっているが、まだ足りないという声があり、より一層進める必要性を感じています。また、新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行したものの、人と人

との繋がりが完全に戻ったとは言い難く、最低限のことはできているから地域との繋がりはなくてもいいという意識を変えるためにも、このタイミングで条例を作り発信することが必要と感じています。条例を制定した先には、正しい言葉、正しい理解が浸透することで偏見をなくし、世代問わず繋がる共生社会を目指していきます。今後、これらを検討の過程で十分に話し合い、条例案に盛り込むことを委員会の目的とします。

続いて、方向性です。今回は「地域とのつながりと希望について」をテーマに、各々が持つイメージの共有を行います。次回以降は、具体的に「大切にしたいキーワード」を挙げ、条例に載せたい言葉を整理します。その後、事務局で素案を作成し、地域の声も合わせて委員で検討し、条例案を確定する流れです。既にボランティアや住民が、イメージを出し合う作業を始めています。皆で共生に向けたイメージを膨らませていきましょう。

曾我) ここからは委員長に議事進行をお願いします。

【3-1. 「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」を活かして、ともに】

永田氏) 話し合いの土台になる情報を 2 つ提供します。1 つは、市が条例を作ろうとしている理由、必要性和今の社会の動きについて。もう1 つは、市ならではの条例を作るための要点です。

(スライド4) 現在、泉南市は高齢化率 29% を超え、地域別では 70% を超えるところもあります。こうなると認知症はごくありふれた状態で、特別なことでも他人事でもありません。今後、1 人暮らして認知症になる方が相当増えることが予想され、地域で暮らすことが全国の大きな課題です。泉南市はケアの現場の方、市が試行錯誤しながら先駆的な取組みをされていますが、高齢化率がさらに上がり、若者が減り、町全体の活力が落ち、予算も人手も限られる中で、認知症のある本人・家族も、地域の人も働く人も、今まで培ったことを生かしつつ、もう一歩進むことが必要な時期にきています。

「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」の注目点は、認知症対策や認知症だけを見た取組みではなく、ともに生きることを目的にして、共生社会の実現を全世代型で取組むことを打ち出したことです。国は 2017 年度から「我が事・丸ごと」地域共生社会実現を始めて 7 年経つ中、認知症分野では「共生」に向けた取組みやその効果が一部に留まっています。医療介護福祉の専門職だけではなく、買い物に行くために商工業の人、観光するために旅館やホテルの人、車の免許返納後も移動できるように交通機関の人、教育のために学校関係の人など、あらゆる分野の人と共生社会をつくることを、強力に推進する法律となっています。それを受け、国は認知症施策推進基本計画を、今年秋をめどに作成中です。同時に、市町村、都道府県は認知症施策推進計画の作成は努力義務というところが重要な点で、今、国の決定を各市町村が一律に実施する方法は、地域特性や文化、資源も違う中で、非常に無駄と無理が多く、暮らす人、働く人に合わなくなってきました。ただ、実は計画だけだと非常に推進力が弱いことが今までの検証でわかってきています。「認知症になったらおしまい」、「自分らしく地域で暮らせない」という古い認知症観が残ったままだと、どんなに人手や予算を投入しても効果は出ません。泉南市の方針や力の入れどころをしっかりと決めて息長く持続的に発展させ、着実に進めていくために条例が必要な段階になっているということです。

これから人手不足となる中で、認知症の本人が介護現場で働く、役所で有償ボランティアをする、飲食店を支えるなど、地域の一員としてやりがいを持って働き、得た収入で美味しいものを食べる、孫にランドセル買うなどが当たり前の事として、これまでと同じように、心豊かな日々を送れるように。支えられる一方ではなく、地域の大事な一員として、一足先を行く先輩として、一緒に楽しいアイデア出ししながら、希望が持てるまちを作りましょう。認知症になったら実際に何が必要か、本人や家族の声を聞くことが原点です。そこを大事にしながら意見を出し合っていければ、また、委員の皆さんが他の人の声をキャッチしていただけたらと願っています。

【3-2. 「(仮称) 泉南市認知症条例」の検討に向けたアクションミーティングの報告】

永田氏) 本日午前のアクションミーティングでは、20 分位で湧くようにアイデアが出てきました。報告をお願いします。

原) 当事者、住民、専門職、計 22 人が、地域とのつながりと希望についてイメージを出し合いました。「みんな違ってみんな

良い」を中心に、いくつかフレーズを付けました。

まずは尊厳を大事にしたい、自己決定ができる支援をやってほしい、１人１人がみんな違う、それを受け止めよう、という思いを「みんな友達」というフレーズにまとめました。友達、つまり顔の見える関係ができていれば気楽に挨拶ができて、有事の際に助けてと言えます。

次に、自分のやりたいことを実現できるまちになったらいいよねという思いで「チャレンジ」です。チャレンジするためには、様々なサポートが必要なので、「頑張ろう専門職」も入れました。本人家族が相談窓口で冷たくあしらわれ、二度と相談したい気持ちになれないことがないようにと思います。

続いて、居酒屋やカフェなど、気楽に集える場所が、歩いて行ける距離でたくさん欲しいという思いが「みんなが集える場所」です。子ども大人も楽しめるというところが大事な部分です。

先程の「みんな友達」のところに「希望」と挙げ、子どもたちに学校で正しい知識を伝え、教育を積み重ねて、偏見を開放できたらという希望を込めました。^わAO伴^お団^{ども}旗（認知症普及啓発イベントの寄せ書き。会場に展示）の子どものメッセージにも希望が詰まっています。子どもと一緒に楽しめること、例えば世代間交流で、お化け屋敷、音楽祭を企画するのもいいですね。集いの場にも来てもらいたいです。

続いて、「もっと知りたい、もっと教えて」です。家族は相談時、何を相談しようか、抱える思いをどんな風に言ったら良いか迷うというのが正直なところ。若年性アルツハイマーと診断が下りても、そのまま帰されてしまい、これからどうしたらいいのかと悩みながら、相談場所がわからないことがあります。診断後、その場で丸々受け止めてもらえる相談窓口があると一番良い、という話が当事者の集いでよく出ます。情報発信する私達の努力も必要で、情報が欲しいと思う前段階にも興味を持ってもらえるように、情報提供の場を作っていきたいです。

永田氏）既にとても大事なキーワードが出てきています。１人１人違って良い、１人１人の意見や気づきを出し合い、大事にしながら、検討を積み上げていけると良いですね。

【3-3. それぞれの立場からのメッセージ（地域とのつながりと希望について）】

永田氏）次に、問題指摘というよりも、問題があるからこうあって欲しいという前向きな思いやメッセージをお願いします。

○幸前 弘樹氏（子ども政策課）

子ども政策課は去年４月にできました。本市には子どもの権利条例があり、子どもを主体に、子どもが何をしたいのか、子ども達の人権をどのように維持するかという、全国的にも珍しい条例です。

午前中の報告を聞き、子どもと共通する視点が多いと感じます。情報発信でいうと、居場所等で子どもの意見を吸い上げて市としてできることを今、課で考えています。以前の市内勉強会で、全国的に認知症のある方と子どもの色々な取組みがあると聞き、そういった動きも出来ないかと思っています。

○谷岡 悦子氏（政策推進課）

政策推進課は、福祉、教育、都市整備、財政運営など、全て総括した泉南市のまちづくりの方向性をまとめています。令和５年４月から新しい泉南市の総合計画が開始しました。新しい総合計画では、『ちょっとええやん なかなかええやん かんじる つながる ひろがる 住人十色のまち せんなん』というキャッチフレーズのもと、１０年間のまち作り計画を進めています。『住人十色のまち せんなん』は、住民１人１人の個性を尊重しつつ、１人１人の幸せを実感できるような、まち作りを推進するという意味合いです。報告の中の「みんな違ってみんな良い」というフレーズは、まさしく私達が目指すまち作りです。しかし、まち作り、地域作りは行政だけでは絶対できません。地域住民、子ども、市内で働く人、色々な方々の協力を得て初めてできることだと考えており、関わる方々の意見を聞きながら進めていかないといけないと実感しています。市として声を拾える場、皆さんと交流が出来る場を、どんな形で実現するかという課題は色々ありますが、皆さんと一緒にまち作り、地域作りをできればと考えております。

永田氏)もしかしたら、条例の検討で出た声が、他にも生かせる面があるかもしれません。

○谷村 真理子氏(障害福祉課)

障害のある方の立場と市職員の立場という 2 つの視点で考えました。まず、障害のある方の立場では、私の担当する療育手帳の面談時に、地域との繋がりについて聞くことがあります。「挨拶程度の関わりですか」と聞き、それに対する答えは「はい」や「挨拶ありません」が多く、障害のある方は地域との繋がりが薄いと感じます。軽度の方は就労で繋がるのですが、より繋がりが必要な重度の方は、家族が守り切ってしまい、家族と支援のみでコミュニティが形成されることが多いと感じます。家族は、本人の可愛さや劣等感から、本人を囲い込むことがあり、地域との繋がりが希薄化し、コミュニティがどんどん小さくなり、障害を持たない方と障害のある方の関わる機会も減っているという風に考えます。

市職員の立場では、入庁時には、市民にとって身近な職員になりたいと思っていました。役所の窓口手続きで、辛い手続きの時に、窓口の人や、窓口自体の威圧を感じたことが理由です。しかし、いざ支援する側になると、相手はどうせ公務員だからと心を開いてくれず、窓口の亚克力板 1 枚の壁がとても厚く感じます。立場の違いが難しいと日々感じます。

希望としては、難しいかもしれませんが、障害がある事を我が事としてとらえ、お互いを身近に感じられることです。大人になると「障害者は平等に」という考えが先走り、「〇〇さんは障害がある」ではなく、「障害がある〇〇さん」と考える傾向があります。子どもの時から、「〇〇ちゃんは何か苦手がある」という風に、正しく理解出来ればと思っています。

○伊藤 哉柄氏(認知症の本人の家族)

私の妻が重度の若年性認知症です。行政の人や施設の人に本当にお世話になっています。8 年ほど前に泉南市に来ました。その時に関係者の人と出会うことが出来て、その人からの繋がりで、色んな行政サービスを受けることができました。そのおかげで今色々助かっているのですが、その辺りの情報が、普段暮らしていると聞こえてこないんです。回覧でも回って来ず、この前、広報に 1 枚チラシが入ったきり。まちの中には、障害者の相談するカフェが沢山あると思うのですが、私が知っているのは「おいでや!泉南」だけです。私は偶然知ることができましたが、認知症の家族を持って物凄く苦勞している人がまだ沢山いると思います。その人達に情報が伝わっているのでしょうか。特に若年性の場合、親はやっぱ隠します。私の妻の親もそうで、一緒に散歩することを物凄く嫌がっていました。だからそんな人達にも普通に情報が手に入る取組みが何か出来ないかなと今思っています。私は、引っ越して来た時に町内の皆さんに、妻が認知症なのでちょっと頼みますと伝えました。すると皆さんが優しくというか、変な目で見ることなく接してくれました。だから当事者側の取組みも必要だと思っていて、皆さんに知ってもらえるような事が出来たらと思っています。

○森井 文乃氏(認知症の本人の家族)

私の主人が若年性認知症と診断されてから 10 年になります。最初に診断を受けて思ったのは、生活のこと、主人の仕事のこと、家のローンとか、病院はどうしたら良いのだろうとか、本当に迷っていました。最初は、先生に怒られるかもしれませんが、恥ずかしい気持ちもあったし、何でも自分でしなければいけないのかなと思っていました。だから最初は職場でも主人の事を言っていなかったのですが、一人の相談できる人(看護師)から病院を紹介してもらって、今も通院し、働かせてもらっていて、生活の方は一部それで何とかなっています。前職がクビになったので、いきなり生活に困ってしまい、障害年金を受けようと思いインターネットで調べ、社会保険労務士に頼んで障害年金を受けることができました。

その後、何人かの人の助けも借りて、私は泉佐野市在住ですが、泉南市の検討委員会や講演などに参加させてもらい、色々な事を教えていただいて一番大事だと凄く思った事は、みんなに知ってもらう事。隠すのではなく、認知症はこういう病気で、認知症であっても 1 人 1 人症状も悩んでいる事も違う。1 人 1 人違うというのも、みんなに知ってもらうことが凄く大事だと思いました。私は何か協力出来ればと思って参加させてもらいました。泉佐野にこのような集まりがある事は知りません。認知症カフェは何ヶ所かあることは知っていますが、行こうという気持ちに全然なりません。今後そういうのも参加してみようかなという気持ちにもなってきたので、泉佐野でも繋がってくれたらと思っています。

○森井 洋一郎氏(認知症の本人)

皆さん、当たり前ですがけれども、認知症の症状は1人1人違いますので、1人1人をしっかりと見てあげてください。私も認知症当事者ですが、よろしくお願いいたします。サポートに携わる立場の方々が、当事者に対して上から目線、例えば言葉もかけず目も合わさず、うなずくだけの扱い・返事というのは、やはりやめていただきたいです。1人の仲間、1人の友人として、同じような作業、活動をしていてほしいです。あまり先回りして心配し過ぎるような言葉、行動をとられると、受ける側としてはすごく心配になるのと、より一層不安が増すので、そこはそっとしておいてあげてほしいと思います。

次に、認知症当事者のご家族は、できるだけ本人1人でできる事はさせるようにしてあげてほしいと思います。最初からそれは駄目ですよとか出来ないですよとか、そういう風な決め付けはせずに、できる事はさせてあげた方が、もちろん覚えていきますし、忘れないことだろうと思います。

今私が一番やってみたい事は、何か形あるものを残すこと。例えば公園に、オブジェのようなものを作っていければというふうに思っております。あと、訴えたい、言いたい事ですが、森井洋一郎という名前がありますので、名前を呼んでほしい。別に私が認知症だから云々ではなくて、やはり1人の人として、森井洋一郎君、森井君、森井ちゃん、何でも良いので呼んでいただけたらと思います。あと、私が認知症を患ってからでも、このような場で皆さんにこのような形でお話させてもらえることは、やっぱり多くの方々にわかってもらえますので、私自身はすごく安心といえますか、ほっとします。私が1人でできる事というのはもう本当に全く無いんですね。家内や病院関係者、多くの方々のサポートがあってこそ、1日1日の生活が成立していついていますので、それはそれでももちろんありがたい話ですし、それに甘える事無く、精一杯1日1日有意義に過ごしていければなという風に思っております。ご清聴ありがとうございました。

永田氏) 委員会のスタートにふさわしい大事なお話をありがとうございました。

○佐藤 剛氏(泉南市地域包括支援センター)

地域包括支援センターの仕事の中で、認知症のある方、またご家族と話することがよくあります。私達が関わる方々の中で、認知症であることを恥ずかしく思っている・隠したいご家族や、病院に繋げようとしても昔の病院のイメージが先行してしまい、本人は大丈夫だと主張されて、中々行けないという方は沢山おられます。恥ずかしい事では無いとお伝えするのですが、森井さんの奥さんのお話のように、やはり当事者の方にとっては、最初は恥ずかしいという気持ちもあって、それはある意味当然の反応なのかもしれません。病気になる、出来ていたことが出来なくなるというのは、その人それぞれの段階で受け止めていくことで、最初からみんな受け入れられるわけではないと私達も理解しておくことが大切と思いました。それでも、よかれと思ってしたことが、逆に相手を傷つけてしまうこともあると思います。私自身は、自分の子どもに対して注意や助言をしても、子どもが受け入れる段階に無いと中々受け入れられない、逆に子どもから教えてもらうことも沢山あります。お父さんが間違っていたねと素直に言うと、子どももわかってくれます。子どもと一緒に無いですが、認知症の本人・家族に対応するときに、私が間違いに気づかされた時に、それを修正し、失敗しても挽回していける社会、修正の効く地域であって欲しいと強く思います。また、認知症サポーター養成講座で、幼稚園児の子ども達、小・中学生、高校生と話さず中で感じるのは、皆さん凄く純粋にそれを受け止めてくれます。未来を担う子どもたちが認知症の事を十分に理解して、やさしいまち作りができると良いと思い、今後も取り組んでいけたらと思いました。

○上川 敦氏(泉南市地域包括支援センター・泉南市いきいきネット相談支援センター)

伊藤さんと森井さんのお話を伺って、専門職として反省するというか改めていかないといけない部分もありました。地域包括支援センターの職員として認知症のある方に対応することは、ほぼ毎日あります。コロナ禍前は地域で非常に活躍されていた方が、コロナ禍で活躍の場を無くし、家に居る事で認知症を発症されて、どんどん進行した方を何人何十人と見てきました。地域で活躍の場があるとか、社会参加の場があることは非常に大事だと実感しています。その中で伊藤さんから、認知症カフェがあることは知っているが、全体的には広まっていないというお話がありました。専門職や行政サイドでは

やっているつもりでも、地域の人からの意見となると、どこに何があって、どんなところに相談できるかわからないというのが現状だと把握して受け止め住民の皆さんへの情報発信を、もっとしていかないといけないと思いました。そして、森井さんから、あまり先回りをされると余計に不安になるし、心配になるというお話がありました。それは、関わる中で何とかお手伝いしたいとか、おそらくこういった所に困るだろうとか、どうしても先を見た上での支援になってしまう所は、専門職にはよくあることではないかと思いますが、先のことをわかっていながらもその人のスピードに応じた支援をしていかないといけないと感じました。専門職としては、本人の意思決定を支援するのが本筋ですが、それだけでは解決しない部分も非常に多いです。そういった所を、地域、隣近所の方が正しい理解や、認識を持って対応していかないと難しいと感じています。条例で、専門職や当事者だけではなく、皆が偏見なく対応できるというような所を期待したいと思います。

○山崎 美和氏(泉南市社会福祉協議会)

コロナの特例貸付返済の部署にいます。返済の相談時に各世帯の困り事を見つけるつもりで話を聞いています。その中で、抱えている問題を問題と認識していない方が多いと感じます。介護が必要な時期であっても自分達には関係ないと思われるいたり、近所の方や家族と疎遠で、問題が表面化しないまま時間が経ち、結局病院が関わって即入院になってしまったり、地域包括支援センターに支援を依頼して関わってもらおうとしても、本人は恥ずかしいと断ったり。その他には、何かあった時のために、相談窓口だけを聞きに来られる方も増えてきています。

私は以前まで長く介護の仕事をしてきました。子どもが小さいときは、理解ある事業所だったので、職場に子どもを連れて行っていたのですが、ある時、義祖母に認知症の症状が出始め、義母と喧嘩になった時、子どもが義母に「きちんとおばあちゃんの話聞いてあげて。おばあちゃんにどうしてそんな事をしたのって話を聞いてから叱って。」と言ったのです。義母は頭を叩かれたぐらい驚いたそうです。この事があって、介護現場に小さい子を連れて行くのは、迷惑がかかるとか、子どもにとってあまり良いものではないのではないかと内心想っていたのが、どんどん連れて行った方が良いと思うようになりました。子どもは今14歳になり、将来は福祉の仕事がしたいと言っています。理由は、「職員さんがすごく楽しそうにおじいちゃんおばあちゃんと話をしていたから。」と。オムツ介助の場面などは見せていませんでしたが、突然怒り出す利用者を見ていたはずなのに、怖がることもなく、その仕事がしたいのだと言いました。友達にも、進路が決まっていない子に、働く人が少ないから仕事があるよと言って福祉分野に誘っているそうです。今、私は実母と同居していて、たまに醤油を冷蔵庫に入れるなど驚くことをするのですが、子ども達は絶対に怒らず、それを黙って元に戻して、「おばあちゃんこれ多分こっちだと思うよ」という感じで話しています。母も孫達が面倒を見てくれると安心しています。本当に子どもの力は凄いと思いながら皆さんのお話も聞かせていただいていたいました。

永田氏) 認知症基本法は、認知症の理解、知識にとどまらず、人の理解を深めることが特徴です。認知症になりながらも人がどう生きていけるのかと。本人だけの力や努力ではなく、子ども達との触れ合いや地域の人、働く場があるとか環境によって人の可能性はどんどん出てきます。子ども達だって十分それは伝わります。本当の意味での人の理解を深めるきっかけを広げる条例に出来たらと思います。

○篠原 カヨ子氏(認知症対応型共同生活介護事業所)

認知症対応型という事業所の立場から、自宅で過ごすことが素晴らしいというのは理解した上で、もししんどくなったときには施設等を使いこなしてもらえたらと考えています。「施設に入ったから終わりではなくて、私達施設の者を上手に使いこなして下さいね。抛り所というか、保険じゃないけれども、そういう場所と受け止めて貰えたら、後ろ髪引かれませんよね。」と、まず飛び込んでこられたご利用者やご家族に対してこのように伝えていきます。なぜかという、家族の多くは施設へ預けて出ていくと泣かれます。ただ、そこの最初の部分を乗り越えたら、次に来てくれるときに笑顔で会ってくれます。本人が帰り際に、自分のことは心配しなくて良いから気をつけて帰ってと言った時に、初めて家族がもう一度家族として戻ると思います。

子どもの力は凄いという話がありました。子ども達が仕事体験で来てくれることが、昔は沢山ありました。その後、子ども

が 1 人で遊びに来た事があり、そこで笛を吹いて披露してくれると、おじいちゃんおばあちゃんもこの前見た子どもやから、と可愛がります。ところが最近では地域で挨拶が出来なくなっているように思います。今は、子ども達に声をかけると、知らないおばさんに声をかけられたと先生や親に報告します。難しく寂しい時代になってきたと思います。もう一度、人と人との繋がりが戻ると幸せだと思います。

○久米 大都氏(泉南市介護サービス事業所連絡会)

介護サービス事業所の立場として、報告の中の「みんなが集える場」、「頑張ろう専門職」のフレーズが強く響きます。「みんなが集える場」は、デイサービスや利用の前段階から作ることができれば良いとつくづく思っていました。みんなコミュニティを求めているはずで、同じ悩みや境遇を分かち合う場があるのは大事だと思います。コロナで集えない時期は、皆さんの体、心の元氣も落ちた状態でした。新型コロナウイルス感染症が 5 類になって随分緩和されていますが、やはりその名残があるのが事実です。家族が少し顔を出してくれるだけでも様子は全然違うし、来てくれたことを自慢して自分の思いが満たされる様子も見えるので、集える場は前段階から色々な形で作っていきたいです。場を提供する側としても、流行りや同年代の懐かしい話、故郷の話、いろんなことを想定することを意識しています。「頑張ろう専門職」は、本人・家族への相談窓口の紹介だけではなく、担当者と担当者が顔を見て、繋いでいきたいです。「ここに行ってください」と紹介するだけだと僕の中では少し冷たく感じるので、「こういう事で悩まれているので、お願い出来ますか。」と担当者に直接伝えてバトンを渡すと実現していくのかなと思います。

もう 1 つ、人はみんな繋がっているのも、良い部分を共有できる場があると、可能性は無限大だと思うので、専門職としてはそこを意識して関わるのが大事だと思います。

○西本 優希氏(泉南市ケアマネジャー連絡会)

午前も参加し、市民や本人家族、市内在勤の方、様々な立場から、1 人ずつ小さな、こんな事言っても良いのかなというようなことでも、声を上げられる貴重な場だと思いました。居宅で働く中で認知症のある方はだんだん増えている印象です。排泄が施設入所を考える大きな要因になりますが、トイレにひとりで行けなくても、立ち上がった時に家族なり誰かが付いて行けば排泄行動ができる場合は、生活全体が出来ないわけではないので、その人が自宅で生活を続けられる方法を考えることも大事だと実感しています。施設を考える時、金銭面で入る事が出来ない方もおられ、辛い思いをされる場合もあります。実際自分たちが年を取った時に、どんな生活をしたいか、どんな町であれば生活できるのか考えながら条例も考えていけば良いと思っています。

○青木 元明氏(病院地域医療連携室相談員)

物忘れを自覚し、自分から病院に来る人は少なく、家族が困って、ようやく病院に繋がった患者さんが多いです。話を聞いていくと、やはり昨日今日そういう状態になったのではなく、年単位で異変を感じて、しんどくなってきたと聞くことが多いです。本人は自覚症状がないまま進行し、渋々病院に来ている様子です。本当に困った時にどこで相談をしたら良いのか、困る前から知っておけるような、何かがあれば良いと思います。病院としても、いつでも診察できることを事前に発信して、早く専門医療機関に繋がる形で、地域で生活する方々のお手伝いができれば良いと思っています。

永田氏) 最近は病院で本人がピアサポートすることもあります。診断後、早期に本人と出会える病院はますます大事になると思います。早めに医師や、同じ診断を受けた方に会えるといいですね。落ち込みが小さくて済む方も多いので、病院で仲間同士の出会いが始まるといいですね。

○有本 弥生氏(病院地域医療連携室相談員)

患者や家族同士で話し合う場について、コロナ禍前は病院で、認知症カフェのようなものはしていました。世間話の中でお互いの問題を伝えて、私だったらこうしているよという相談ができる場がありましたが、今は中々できていません。物忘れ

外来では問診を 30 分間行います。本人には困り事、普段の様子を聞いても、「何も困っていません」の一言で終わってしまい、家族は本人の前では言えない事や、心に引っかかることを聞いてほしいために話が長くなります。時間的な制約があるので、中々できていないところが課題でもあります。世間話でも良いので長く話を聞くことで、心が軽くなってもらえるのかなと思っています。入院患者には必ず相談員が 1 名つきます。面会制限のない数年前までは、毎日顔を見せて、今日はこういう話ができ、できなかった、笑ってくれたなど、患者、家族に良い反応が出ていたので、今後も積極的に関わり関係を築いていけたらと思っています。

永田氏) 本当に切っても切れない医療が、これからの共生のメンバーになったり、職員が限られる中でゆっくり話を聞く人を見つけたりなど、具体的に検討できたらいいですね。今日は全員の声を出していただきました。まだ出し切れてないことや、他の人の話を聞いて思い付いたこと、後から出てきたアイデアなどがあれば、書き留めたり市に言ったりしてください。気づきを大事に温めて、伝え合っていきましょう。中島さん、皆さんの話を聞いて一言お願いします。

○中島 民恵子氏(学識経験者)

皆さんの発言から、泉南市の持つ力がたくさんあると感じました。特に森井さんの、こういう事がもっとできたらいい、先回りされると不安になるという話を専門職の方が受け止め、自分たちを振り返り、この場でもキャッチボールが始まっていると感じました。

子どもの力について、各々の経験に落とし込み、繋がりがどんどん出てきている所も泉南の強みになると思いましたし、コラボレーションができていくような芽がたくさんあって、これが 1 個 1 個具体化し、1 つでも形になればと思います。オブジェを子ども達と作ったら楽しいだろうとか、わくわくするような気持ちを持ちながら話を聞いていました。当事者が地域で生活者として暮らすことは私達とももちろん一緒なので、スーパーや図書館など、行く先々の使い辛さや、少し困ることなどの、バリアを本人と一緒に見て、一緒に外していく。共生社会に向かう時に、認知症のある方が体験している世界を私達が教えてもらいながら、1 つ 1 つ良くしていく取組みができると、認知症当事者に限らず、障害のある人、子ども達にとっても、住みやすい町になっていき、まさに泉南市が目指すまち作りに繋がると思います。

ソーシャルキャピタルとは社会関係資本ですが、地域資源や色んな関係性の目に見えない資本が繋がり、積み上がっていくと地域の中の健康寿命が延び、良い事が起きてくると、色々な研究で言われています。認知症のある方と一緒に過ごしやすい所を作っていくこと自体が、ソーシャルキャピタルを上げ、それが主となって最終的には全体が良くなっていくと感るので、一緒に考えていきたいです。皆さんの後ろ側、横側に繋がっている方たちの声を、どんどん出しながら市や条例に繋がると、とても良いと思いました。

認知症基本法の「共生」、「共に」の定義は、それぞれが互いの個性と能力を発揮し合って、共に活力を上げて暮らせる社会としています。本人家族、そして地域の人、働く 1 人 1 人も、みんな個性があり、実は秘めている力があり、それを共に繋がる中でそれぞれの良い面が伸び、活力ある社会にしていこうというもの。これは綺麗事ではなくて、例えば、常連客に通い続けてもらえるバリアフリーのスーパーにならないと、お店は寂しいし売上も減る。通い続けてもらえるスーパーになれば、お店も職員も活気が出る。医療介護の専門職が牽引役になりながらも、町の色んな分野の人たちが、認知症のある人との付き合い方や考え方を变えて、本人家族の力を借りながら、一緒に元気になるようにできたら儲かって町が維持できる。そういう面も含めて、これからの時代をめがけて、発想とか個性ある意見を出し合えるような、次回またそんな会が持てたらなと思っています。

曾我) ありがとうございます。第 1 回はこれにて終了です。

【閉会】